

賀茂縣主だより

所人主会
行法縣族
財団茂族
賀賀同

しもさか まもる
下坂 守 昭和廿三年石川県生まれ
大谷大学文学研究科修士課程修了
日本中世史専攻
主書 中世寺院社会の研究(思文閣)
現在 京都国立博物館学芸課長

平安時代の神主 賀茂重保の筆跡

国宝 一品経和歌懐紙の中の一

京都国立博物館 学芸課長 下坂 守

詠非力品如日月光明和歌

重保

国宝 一品経懐紙 賀茂重保筆 京都国立博物館蔵

一品経和歌懐紙の遺品として最古の作品と知られる十四紙のうち的一点。十四紙のなかには、西行(一一一八〜九〇)、寂蓮(一一三九〜一二〇二)など平安時代末を代表する著名な歌人の懐紙も含まれる。賀茂重保(一一一九〜一一九二)を筆頭に他に確実な筆跡を残さない歌人のものも少なくない。

法華経(妙法蓮華経)の二十八品を題として漢詩や和歌を詠むことは、古く平安時代前期にさかのぼり、弘仁五年(八一四)撰進の『凌雲集』には、嵯峨天皇の「御製廿二首」に「聴誦法華経、各賦一品、得方便品、題中取韻」と題した

七言律詩が見えている。また、特に同経を根本経典とした天台宗でも早くからこれを行なっており、康保元年(九六四)三月、比叡山の西坂本ではじめて開催された勸学会では、大学寮

北堂の学生と延暦寺の僧とが『法華経』の経文

の一句を題として漢詩・和歌を作ったという(『扶桑略記』)。

平安貴族の間でも盛んに行なわれ、藤原公任の歌集『大納言公任集』には一品経和歌二十八首が、また藤原頼宗(九九三〜一〇六五)の家集『入道右大臣集』には「法華経廿八品歌」と題して一品経和歌が収録されている。

一品経和歌懐紙はまず結縁した品名を題に、ついで「述懐」「懐旧」の題でいま一首を詠むのを常としており、重保の懐紙もこの定型を踏んで書かれる。二首ともに連綿体の流麗な三行書きで、彼の技量の確かさを伝えてあまりあるものとなっている。

この懐紙が制作されたのは、他の作者やその位署書などから、治承四年(一一八〇)春から寿永二年(一一八三)春の頃と推定され、とすれば、重保、還暦前後の筆ということになる。歌人としても揺ぎない地位を確立していたその確実な筆跡としてきわめて貴重な懐紙。

なお、料紙は檀紙で、中央に残る折り跡や左右の綴跡からは、かつては懐紙を反故として袋綴冊子に改装されていたことが知られる。紙背に見えているのはその時に書写された経疏(経典の解説)書写の跡である。

詠神力品如日月光明和歌

重保

隠れにし月の光を残さずば心のやみのいかで晴れまし

述懐

人こころ愛発の山の雪解けてはや平けくなしたまへ神

賀茂重保の和歌懐紙との出会い

このたび、京都国立博物館のご好意により、最近同館の所蔵となった国宝一品経和歌懐紙中の平安時代の神主賀茂重保作にかかる和歌二首の筆跡の写真を本紙に掲載させて頂き、また下坂守学芸課長から解題を寄稿いただいた同族の皆さんにご披露できる運びとなつたのは喜ばしいかぎりである。

この一品経懐紙の存在は、西行、寂蓮、藤原頼補など平安朝院政期の著名な歌人の真筆を伝えるものとして古い時代から専門の書家や歌学者には知られていて昭和二十七年には国宝指定を受けている。ただ、永く個人蔵でまた西行などの有名歌人が前面にでていたため重保の懐紙にまで一般の注意がおよぶことは少なく、おそらく私も賀茂の同族の周辺でも賀茂注進雑記をはじめ賀茂の諸記録にその存在を指摘したものは今までほとんど無かつたと思う。この懐紙が昨年京都国立博物館の所蔵に加わり、この埋没していた先祖の国宝筆跡にひろく接しうる機会が訪れたことは幸いである。

私も同族にかかわる文化遺産には、既に、世界遺産の賀茂神社境内と国宝重文指定のその建造物群、社家の町並み、重文の賀茂禰宜神主系図、競馬会神事など多くを伝えていたが、これらに、この三月重要文化財に指定された神社所蔵の鎌倉時代の賀茂経久(号井関神主)の日記と、この国宝書蹟の二点が公知に加わつたことになる。

私事になるが、この存在に気付いたのは昨年末の事である。架蔵の敦直県主の軸物がある同族の方々と披見していた際、もう少し賀茂流の書の知見を得たいと思い、その後専門書をひもといていたところ偶然一品経懐紙の中に重保の名を見いだしたのが発端である。ただ、個人蔵と記されていて、所在を辿つて昨年に京都国立博物館の蔵となつたことを知つたのは既に歳末のことであつた。同年に「神主賀茂重保とその時代」という拙文を纏めていたのが容易に目にとまる機縁となつたのであろう「母が」。

賀茂重保県主正四位上、号藤木神主は九代神主重継の息として元永二年(一一一九)に生を享け、治承元年(一一七七)

から建久二年(一一九二)正月十二日七十三歳で卒するまでの十四年間賀茂別雷神社の十三代神主の任にあつた。彼が生きた平安末期は正に源平争乱の世にあたり、平清盛や西行法師は彼の一歳上、西行の没したのは彼の死の前年にあたる。

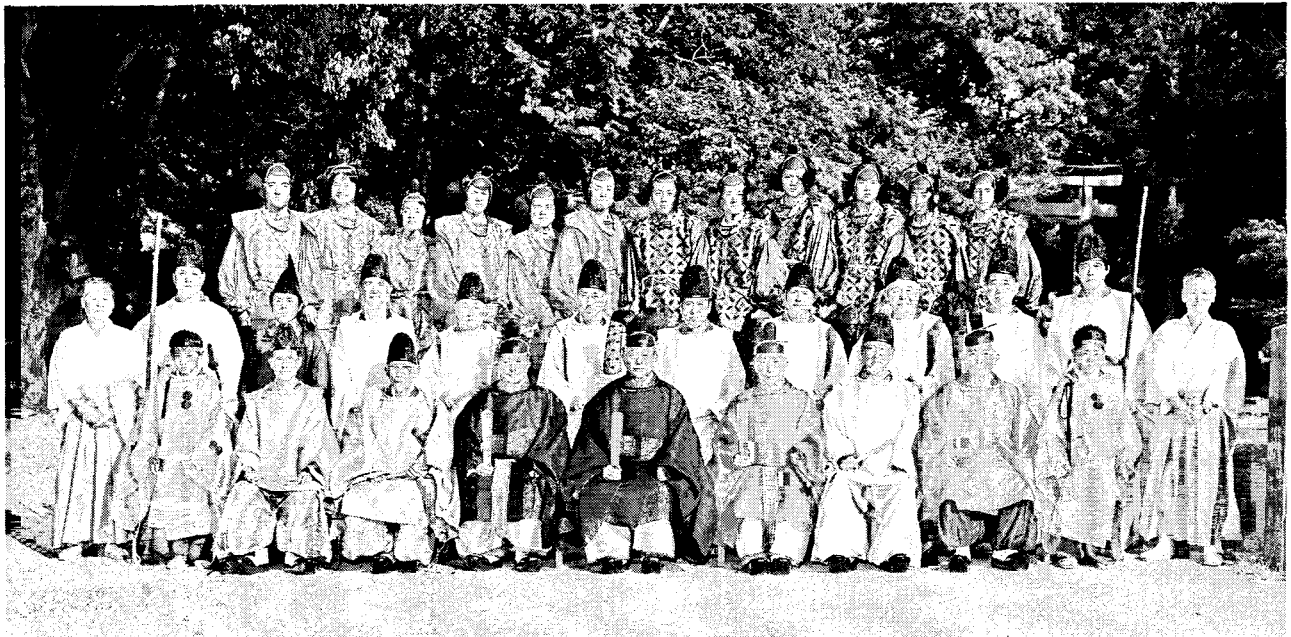
この間、当時の有力な権門の一つであつた賀茂社の惣官として社務の総括と荘園経営に当る一方、歌人としても知られ、藤原俊成、俊恵などの有力歌人や平家一門、摂関家などの貴顕との親交があつく、賀茂社や自邸につどうて歌合・歌会をしきりに主催した当代の代表的な名士の一人で、その周囲には「賀茂歌壇」が形成された。主要なものに「重保家・賀茂卅講歌会」「別雷神社歌合」「祈雨法楽歌会」「曲水宴歌会」「七臈尚歯会」などがある。現存する歌は六十五首で「千載和歌集」「新古今和歌集」「風雅和歌集」など歴代の勅撰集に詠草がのこる。なかでも、寿永元年十一月に彼が編纂した「月詣和歌集」十二巻千二百首は今日に残る和歌史上の業績である。他方、彼の在任中の治承四年(一一八〇)から文治二年(一一八六)の間は源平

動乱と重なり荘園への武士の乱暴狼藉が相次ぐが、後白河院、藤原兼実をはじめ有力者との人脈が役立ったのか、文治二年に、有名な源頼朝の「神領諸荘の安堵状」を取得したことも任期の晩年のこととして見逃せない。

なお、一品経懐紙は日韓の文化財交流で九月末頃迄韓国各地を巡回展示中で、国内での観覧は十月以降になるとのことである。(藤木文雄)

関東グループ総会のお知らせ

平成十四年度関東グループ総会が来る九月十五日(敬老の日)午後三時より午後五時迄の予定で開催されます(但し開催場所未定)年一回関東四県(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県)在住の会員の方々の懇親の場として平成十一年より実施し、昨年は総会の他に「賀茂」に関する諸々の事を知るために勉強会が藤木宏清宅(東京都中野区の貞源寺)に於て開かれ、等その動きも活発になつてきて居ります。本年度は総会当日に昨年と同様勉強会も併せて実施致したく思いますので奮つてご参加下さい。詳細は後日東京グループから発送される案内状をご覧下さい。



平成十四年五月五日

競馬会神事奉仕者

(敬称略)

第三列目

第二列目

第一列目

- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| 右方乘尻 (浦野和清) | 催方 (藤木文雄) | 扶持 (山本信吾) |
| 右方乘尻 (山本幸大) | 右方肝煎 (山本正信) | 陰陽代 (松田一雄) |
| 右方乘尻 (中大路大直) | 右方催方 (岡本修) | 目代 (藤木典直) |
| 右方乘尻 (山本智也) | 頓宮預 (梅辻諄) | 右方念人 (堀内保丸) |
| 右方乘尻 (市法明) | 右方後見 (西池隆造) | 神主 (建内宮司) |
| 右方乘尻 (岡本清虎) | 右方後見 (岡本清仁) | 左方念人 (藤木茂) |
| 左方乘尻 (市聡顯) | 左方後見 (市忠顯) | 所司代 (市和顯) |
| 左方乘尻 (山本宗尚) | 左方後見 (戸田保輝) | 催奉行 (北大路元顯) |
| 左方乘尻 (岡本征晃) | 左方催方 (堀川潤) | 扶持 (堀内保大) |
| 左方乘尻 (山本健太) | 雑色 (田代稔) | |
| 左方乘尻 (中大路竜直) | 左方肝煎 (山本浩久) | |
| 左方乘尻 (山本浩矢) | 催方 (藤木啄也) | |

在實一千年祭に向けての投稿(其九)

岡本 光子(京都市北区上賀茂)

明治四十年四月二十八日

中祖在實君 九百年薦事報告書より
五十二首の内の五首

献備之歌

対花言志

中教正 榊原長敏

削りても おもふ心の一言を

かかまほしけれ 花の木のもと

今西 弘重

けふの日もさくらのもとに立馴て

あかぬ思ひを 盡しけるかな

廣川

散をなほ をしみし人の思きや

花にをしまるゝ世とならんとは

波多野 静子

神山の ふるきむかしの春の色を

猶思出る 花のかけかな

加藤 誠定

世にありて 君もなかめしきくらの花

散てかへらぬ 昔をぞ思ふ

寄稿

我が天職

山本 英頭

コンコンと金属を彫る音がする職業彫金町内の人達は好意的に受け入れ町の風物にと、一人よがりに解釈していません。東山の麓に広大な地を有する知恩院参道、新橋通と白川通の間で東大寺通の東側が松原町、通称袋町と呼ばれる所で生まれ育ちました。

朝お寺の鐘、そしてお勤めの木魚の音で一日が始まり、やがて祇園花街に近い処柄、三味線の師匠が弟子に稽古をつける三味の音がする頃、父を師匠に弟子入り、南向きの明るい二階にて彫金の修業をした時代を思い出します。祖父山本乙頭は上賀茂山本町を住居に定着、やがて古門前の白川端に転居し縁あつてか、貿易商の野川商店(四条御旅町)へ祖父と父二人は通勤、作品は海外の愛好家により大半が海を渡ったと思われます。

近年欧米では金属工芸品がブームとなつて久しいが『日本固有の合金』を彫金に用いる色金は各自が流し込により

作り出し、単一金属の金・銀・銅などを駆使して微細表現の表面加飾と立体工芸作品・調度品なども作った。

器の金属をアンダカットの溝を彫つて、テーパークットの色金をはめ込む象嵌技法を室町時代の名工後藤祐乗が創案して刀剣装具に用いた『高肉彫色絵象嵌』の技法を受け継いだ家柄。

我が家の彫金は明治から始業父頭保は四代目で口伝として先記の後藤家の伝統技法を伝承しているだけに、次への世代は、幸い息子が後継して現在に至る今日、彫金の奥深さを体得中だろう。多岐にわたる彫金、なかでも高肉彫色絵象嵌は日本固有の世界に類のない金属文化だと思ひます。

若い頃視野を広め、感性の研鑽と努力目標に日展への出品、豊大のパネル制作して再々入選、地元京都の京展は連続受賞により出品委嘱作家になれたが、何か違う道を歩んでいるようで中断して、色絵本象嵌に専念する。

現在迄に多くの人に支えられ、教えられた恩返しに、美しいものを見て頂くのが、唯一できる取柄です。

今後公募展に出展して多くの人に見

て頂くのもよいし、私宅を展示に相応した家屋の建立、実現は夢が大きすぎますが、我家の先人が作った歴代の作品を知人・友人の協力もあつて数少ないのですが収集したものと、自作も合わせて常設展示が今後の課題と存じます。

金属文化は、「光と色」と調和した雰囲気の中で見るのが大切。時には質感と量感とを手に持つて味わうことが工芸には必要、たかねがね考えています。

略歴

- 昭和十二年 京都に生まれ 父頭保四代目のもとで彫金を学び高肉彫色絵象嵌を家伝の特技とする
- 昭和三十一年 京都市立 堀川高校卒業
- 昭和三十七年 京展(京都市展)初入選
- 昭和三十八年 日展「結象」にて初入選
- 昭和三十九年 京展「青樹」にて市長賞受賞
- 昭和四十年 京展「流象」にて市長賞受賞
- 昭和四十一年 京展以後出品依嘱
- 昭和四十一年 工美展(京都府展)初入選
- 昭和五十四年 創立第一回日本新工芸展入選

以後各展に出品現在に至る
他の展覧会にて市長賞ほか受賞

所属

- 京都工芸美術作家協会
- 京都金属工芸研究会
- 京都府匠会会員

その他 主な活動

- 平成元年 伊勢神宮第六十一回式年遷宮御神宝制作、馬廻御装束、生地造り彫金と象嵌仕上、御太刀、玉纏御太刀、彫金薄肉彫りをほどこす
- 平成五年 昭和度御太刀、彫金薄肉彫りと魚々子地蒔
- 平成六年 法勝寺跡出土、鍔形雲龍文(兜の前飾)
- 京都府立文化博物館常陳
- 平成八年 寺宝制作、白金・金赤銅銅・天然石二十八石使用・高肉彫色絵象嵌の香盒

近年は信仰対象の宇賀神像・毘沙門天像・聖天像などを鑄造して彫金精密仕上・阿弥陀如来像の袈裟と衣を鋲彫技法で模様加飾、眼を白金と赤銅象嵌を施す。

系図曝涼のお知らせ

来る七月二十八日(日)、(雨天中止)恒例の同族会所蔵の重文系図を曝涼致します。詳細は別途通知の案内ハガキを御覧下さい。

寄稿

美作・伯耆国の倭文神社巡り

市忠顕

(1) 明石市魚崎の住吉神社(息子、聡頭の案内による)

賀茂別雷神社の競馬を描いた特大の絵馬(石田遊汀、天明八年、一七八八作)があり、倭文・金津のペアが鮮やかに描かれている。神門と拝殿の間に神樂殿があるが、この神樂殿は能舞台にもなるように作られている。拝殿はコンクリート造りで、この中に例の絵馬がある。本殿の方に向って左側に競馬の絵馬。右側には「円山応挙筆の絵」が有った。本殿は拝殿の後ろに四社が横一列に並んでいる。屋根の形は春日造り風だった。千木の形から、一番左(西)が女神(神功皇后)と分る。

岡山県久米郡久米町の倭文神社と貴布祢神社(旧別雷神社領倭文庄)

(2) 倭文神社(久米町油木北小字宮原直ぐ西隣の岡に少彦名神社あり)

油木北のバス停付近から倭文川の方へ下り、橋を渡って川沿いの道を少し

上手(西)に行くくと右手に鳥居がある。

鳥居をくぐり、まっすぐ進むと石段が続く、そのあがった所に隨身門があり、左右に隨身像があつた。拝殿があり、本殿はさらに一段高い位置に建っている。本殿は高床式で回り縁があり、屋根は春日式に近い。地元の人は少彦名神社を「上の杜」、倭文神社を「下の杜」と呼

んでいる。

秋祭は十月の第四日曜日。現在宮司(太夫さんと地元の人はおつしゃつていた)はいない。祭の時は、津山から神職の方を呼んでいるとのこと。

(3) 貴布祢神社(久米町桑上)

南側が正面参道で、集落の所に石の鳥居があるが、ここから神社への道は荒れていた。勾配の緩い石段を上るとかなり広い広場になっていて、左手に拝殿があり、その奥に本殿がある。本殿は東向き。本殿は流造りでかなり大きい。拝殿は横に長い。奥宮に「オオカミ様」の呼名がある。秋祭は倭文神社と同じ十月の第四日曜日。

四時過ぎ、聡頭を津山駅に送り、米子道を通って湯原へ。湯原温泉に泊る。

十月八日(日)

ダム下の露天風呂を遠望。この露天風呂は近くのホテルから丸見え。次に車でダムの堰堤の上に行き、眼下の湯原温泉およびダム湖を眺める。国道313を北上し、国道482との分岐点近く(中和町初和)にある銀杏(イチチョウ)の大木を見学。直径が両手を広げた

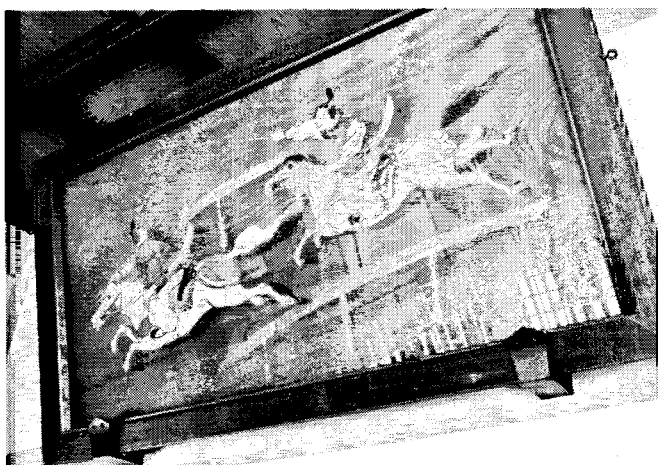
よりもやや大きい立派な木であつた。

雌木で銀杏(ギンナン)がなつていた。

国道482を一路三朝温泉方面へ向う。途中、国道からそれ、(4)中和(チュウウカ)町大字別所の加茂神社に立寄つた。小さなお社である。別所地区の鎮守。地元の人親しみを込めて「かもさん」と呼んでいた。国道へ戻り、鳥取県に入る。国道から福本の集落に入る道(旧道)との分岐点を少し下り、県道38号との分岐点の少し手前左側に樺の古木がある。(鳥取県名木百選)福本の古老の話では以前二本有つたが、古い方は枯れてしまったそうである。そばに説明の看板と百選の標柱が立っている。

(5) 三朝町の賀茂神社(鳥取県東伯郡三朝町大字森)

三朝町の加茂川下流の大字森に賀茂神社がある。県道205号線から南側に鳥居が見える。参道をまっすぐ南に向うと民家に接して賀茂神社がある。北面である。鳥居の右手に石の標柱があり、賀茂神社の名が刻まれている。神社で遊んでいた子ども達は、〇〇君の神社と呼んでいた。そこで〇〇君(神社の直ぐ前のお宅)を訪ねたが、先



住吉神社の絵馬(明石市魚崎)

代宮司のお子さんは宮司を継がず、警察官をされているそうだ。御祭神とかの詳しい話は聞けなかった。

東郷湖湖畔の燕趙園(中国庭園)隣のレストランで昼食をとり、隣の燕趙園を訪ねた。ちょうど「燕趙園祭り」をやっている。「竜踊り」や「中国風獅子舞」を見学できた。中国式の獅子舞はダイナミックでユーモラスであった。

(6) 東郷町の倭文神社(鳥取県東伯郡東郷町宮内)

伯耆国一の宮で、延喜式内社。祭神は建葉槌命(主神)、下照姫命、事代主命、建御名方命、少彦名命、天稚彦命、味耜高彦根命。現在では安産の神様(下照姫命)として崇敬されている。(葛木)カモ関係の神様がずらりと揃って居られる。伯耆国一の宮だけあって立派な社殿である。本殿は流造りの大きな建物であった。(別雷社の本殿よりはるかに大きくて高い)社伝によれば、当地は出雲から海路をやってきた下照姫命が上陸して住みつかれた住居跡だそうだ。創建当時の当地の主産業が倭文織であったので、建葉槌命が主神として祀られたという。

(7) 倉吉市志津の倭文神社

伯耆国三の宮。延喜式内社。倉吉市の中心部から南西約8キロの農村部(小鴨川の支流の国府川上流のなだらかな丘陵地帯)に位置する。むしろ関金温泉に近い。国道313号線の関金の交差点を下米積(しもよねづみ)方面へ右折れし、県道50号に従って下米積方面へと走ると、「志津方面左折れ」を示す標識が右手にあったので、車を止め左手の坂を上る道を見ると、なんと鳥居が見えるではないか。鳥居の所まで行ってみると、「倭文神社」の文字が読めた。この道に沿って車を進めるが、神社がなかなか見えてこない。志津の集落に近づいた所に地区の案内板があり、神社の位置も示されていた。(鳥居の所から約2キロ)神社までは左折れと、右折れを二回もしなければならず、複雑であったが、よく頭に入れたせいで、迷わず神社に着けた。田舎の割りにといえば失礼になるが、伯耆国三の宮だけに立派な社殿であった。本殿は流れ造りと春日造りを合わせたような特殊な型で、高床式で建物の高さがずいぶん高い。祭神は経津主命、武葉槌命、下照

姫命。ここでも下照姫が配されている。下照姫は「織姫」の性格が強いと感じた。神紋は丸に倭文の文字。昭和十七年県社。社叢が深く、大きな木が多かった。椿の木も何本かあった。燕趙園に寄ったりしていたので遅くなり、地元の人に話を聞けなかったのが残念である。志津の地名により、倭文織の倭文の音が志津(シヅ)であることが分る。志津織(シヅオリ)がまつてシドリになったことが傍証される。服(織)部(はたおり)のハタオリがハトリ(ハットリ)となったのと同じ原理である。

俳壇

上賀茂 北大路 みよ子
古への 鏡を花器に 競へ馬
艶やけき 二葉葵の 祭待つ
御神灯 献じて終る 賀茂祭
御戸代能 社にぬける 風涼し
形代の 映えつ流れつ 川篝かがり

葵歌壇(一)

冷泉家玉緒会所属
上賀茂 北大路 和子
立春
鶯の声もみ雪もとけぬ間に
けふ立ちかへる山里の春
新樹
ほととぎす偲ひ音洩らす夏木立
山吹
川岸のやなぎ下葉にかくれつつ
答へぬ色に匂ふやまふき
夕立
鳴神は轟きわたり風はやみ
鳥うちさわく森の夕立
扇
夏はつる扇に露の置き初めて
奈良の小川の夕へ涼しき
上賀茂 岡本 光子
賀茂社鎮守の森天高く
御神の刀雅びに給うたま

葵歌壇(二)

岩倉 藤木 文雄

賀茂御祖社の奉りにし先の帝遺愛の
みおやのやしろ

葵を同じき別雷社に移し植ゑるとて
わけいかづちのやしろ

皇の植ゑ給ひける葵草
すめらみ

移しし沙庭に仄かにぞ咲く
さには

初めて賀茂競馬会の所役を務めて
かもくべうまのま

兼好も見しとふ賀茂の競馬

棟は今にし川の辺に咲く
あふち

勝ち負けはいかがなりやと問ひし声

棟は幾たび聞きてしあらむ

ももちたび乗尻の問ひ聞きつらむ
のりじり

奈良の川辺に棟けふ咲く

深泥池畔を行くバスの車窓から

たそがれの深泥ヶ池に時雨来て
しぐれ

枯し蘆間に鳩のなづさふ
あしま



平成十四年四月十四日(日)上賀茂神社
涉成園で開催された曲水宴奉仕の童子
四君。



山本 卓弥 山本 晃大
堀内 保大 山本 信吾

チーム活動報告

梅辻 諄

歴史勉強チームからの報告とお願い

われわれ同族にとつて最も大切な記

録は言うまでもなく「賀茂県主系図」と

「賀茂注進雑記」です。前にもお知らせ

したように「賀茂注進雑記」の輪読を月

に一回の勉強会で一昨年来続けて来ま

したが、一応読み了えました。今後更に

理解を深めるため、釈注の作製と誰に

もよく分かる現代語訳に挑戦したいと

思います。また、新しいテーマ、例えば

各家系の歴史とか競馬会の歴史などに

も取組みたいと考えています。これが

面白いと思われるテーマのご提案をお

待ちします。

昨年からは始めた歴史勉強チームの報

告文集「みたらしのうたかた」を今年も

祖先祭を機に第二号を発行する予定で

す。内容は歴史的な論考だけでなく、エツ

セイや懐かしい故人の想い出、あるいは

歴史勉強チームに対する提言などい

ろいろと原稿をお寄せ下さるようお願い

致します。A4版でそのまま写真印

刷のできる原稿の〆切は九月末日、手

書き原稿の場合はなるべく早くお送り

下さい。

同族会会員住所分布表

(平成十四年七月一日現在)

京都府在住者

一九五名

○上賀茂地区

五八名

○京都市内(上賀茂地区を除く) 一二二名

○京都府下(京都市内を除く) 二五名

他府県在住者

〔()内は会員住所を示す〕 二〇〇名

○北海道、東北地区(北海道、宮城) 三名

○関東地区(東京、神奈川、埼玉、千葉、栃木、群馬) 九二名

○中部地区(長野、石川、静岡、愛知、三重) 一七名

○関西地区(滋賀、大阪、兵庫、奈良、和歌山) 八〇名

○中国地区(島根、岡山) 五名

○九州地区(福岡) 三名

会員数合計 三九五名

なお、平成十三年名簿発行後の異動は、新規加入者七名、死亡者六名であった。

会務報告

副理事長 北大路 元顕

◎第二十六回理事会(出席十一名)

平成十四年二月二十四日

一、十四年度事業計画及予算案の件
事業計画について

イ、賀茂称宜神主系図(國指定重要文化財)の曝涼に併せて一般公開すること

ロ、競馬会神事、葵祭、久我神社春秋例

祭への参列等の神事奉仕

ハ、祖先祭の実施

ニ、助成金の募金

ホ、賀茂県主同族系図の整備作成

ヘ、中祖在実卿千年祭の実行準備等

の提案があり全員の賛成を得た。

予算案については祖先祭玉串料の減少

傾向、平成八年から実施している助成

金の増収が見込めない為その対策を考

えるべきであるとの意見が出されるも

原案通り全員の賛成を得た。

二、細則案の件

藤木文雄理事から評議員会規則案、常務理事会規則案、理事会規則案の説明

があり全員異義なく承認した。

三、新規加入申込者の審査の件

三宅季文(奈良県)藤木保武(宇都宮市)両氏の加入が認められた。

四、報告事項

イ、賀茂別雷神神社責任役員就任について理事長から関目氏辞任後の経過説明

後、「同族会と賀茂社との本来の関係を構築すべき」と思ひ就任する事としたの

で承認を得たい」との発言があり全員

異義なく了承した。

ロ、中祖在実卿千年祭計画構想の説明

があり、準備委員会を設置しメンバー

は今後協議する事とした。

ハ、二月十七日神社との神事初会合に

於て所役が決定された。

尚練習方法については第二十五回合同

事務局会議に提案された堀川潤評議員

の「競馬練習について」を採用試行する

事では承された。

二、平成十四年二月現在の会員数三九

三名であるが現在活動中の関東地区に

続きその他の地区支部の設立を推進す

る事が申合わされた。

併せて支部構成府県を決定したい、又

平成十四年度会員名簿には支部欄、

Eメール欄等を設ける事が話し合われ

た。

ホ、二月十日太田重明評議員から十万

円の寄附があり、有難く頂戴し、とりあ

えず助成金収入に繰り入れた旨報告が

あった。

◎第二十四回評議員会(出席二十名)

平成十四年二月十七日

一、十四年度事業計画及予算案の件

事業計画及予算案について説明があり

全員の賛成を得た。

(注)詳細は第二十六回理事会議事録参照

二、競馬会神事、葵祭、曲水の宴の件

各神事の所役分担について報告があり

四月十四日開催の「賀茂曲水の宴」に於

ける童子役として次の四名を推薦する

事となった

山本 晃大君 (山本寛人氏の長男)

山本 信吾君 (山本祐司氏の次男)

山本 卓弥君 (山本 直氏の長男)

堀内 保大君 (堀内邦保氏の長男)

三、新規加入申込書審査の件

(注)詳細は第二十六回理事会議事録参照

四、報告事項

イ、西池理事長から賀茂別雷神神社責任

役員への就任要請があったので、理事

会の賛意を得て就任する事になった旨

報告があった。

ロ、中祖在実卿千年祭行事について

藤木文雄理事の私案が報告され、今後

検討する事とした。

ハ、支部の構成府県名について、現在結

成されている支部(関東グループ)にと

の府県を含めるかについて話合われ、

又未結成支部(仮称阪神グループ)につ

いても範囲府県を決めて行き度いとの

説明があり、今後協議する事とした。

「編集後記」

○平成十四年四月号「きょうと府民だより」に

会員の山本英顕さん(東山区在住)の記事が

紹介されてお読みになった方

も多いと思いますが彫金界では各種種しに

出展数々の賞を貰われ、なかでも伊勢神宮

の式年遷宮時には同神宮の御神宝の制作に

携わる等、その活躍の程は同族会の一人

として誇りに思うところであります。今後

更なるご活躍を期待するものであります。

○平成十四年、「賀茂曲水宴」に会員子弟四君

が「水干、袴」姿で小川に流れる羽觴を繰つ

る様子は何とも微笑ましく、本人達も賀茂

伝来の行事に参加した事を永く心に刻む事

と思います。

○第十号をやっとお届けすることが出来まし

た。紙面の割付等本来の紙面構成になっ

ていないと思えますがお許し下さい。